

# ボクが初めて 寺山修司に会った日

霜田 千代麿

今年は寺山修司が亡くなって31年となる。

ボクが初めて寺山修司に会った日のことは、今でもハッキリと覚えている。それは1973年10月の事であった。その前年1972年10月から、ボクはポーランド人民共和国へ演劇の勉強のため留学していた。当時、ポーランドでは何の目的であれ留学した人間は、ウッチ大学付属の外国人のためのポーランド語学校で1年間ポーランド語の勉強をすることが義務付けられていた。

その日久しぶりに学校のあるウッチ市から汽車に乗り、首都のワルシャワに出て来て、日本におられる時から面識のある、ヘンリック・リプシツさんへ電話を掛けた。ヘンリックさんが、演劇の勉強のため早稲田大学に留学した当時、ボクは彼にお目にかかっていた。後に彼は、ポーランドの民主化の立役者、連帯労組のヴァヴェンサ(ワレサ)大統領のとき、駐日大使も務められた方である。

「ああ、シモダさん、久しぶりです。お元気ですか？(流暢な日本語である)アナタ丁度良い所でした。実は今、ヴロツワフ市の国際青年演劇祭へ出演するため、寺山修司の“天井棧敷”がワルシャワに来ているのですよ。シモダさんも演劇の勉強のためポーランドへいらっしゃってるんですから、どうですか、通訳を兼ねお手伝いをしてもらえませんか」というようなことが彼の口から伝えられた。

「勿論、ボクとしては願ったりですよ。ヴロツワフ市でも、演劇祭のチケットが手に入らなくて、困っていた処ですよ」

それから直ぐ、ヘンリックの教えてくれた稽古場へ行ってみた。そこでは、中学生みみたいな感じの若者の一団が歌ったり、踊ったり、怒鳴ったりしていた。60年代から70年代中頃迄、“天井棧敷”はアングラ(アンダーグラウンド＝地下)劇団として、寺山修司の下、前衛演劇の旗手を誇っていた。その風評は、日本国内より外国での方が、いち早く一世風靡していた。そんな中、京都の“くるみ座”(主宰毛利菊枝)の俳優研究所を出て、飛鳥井塾で芝居をして、演劇グループ“夏”を主宰し、そして今、ポーランドのグロトフスキの処へ行って演劇の勉強をしようという自分には、寺山修司の“天井棧敷”は余りにも異質、異次元なものに思えた。

寺山修司という人間は、あくまでもダンディーな人であった。コートか、バーバリーを肩から羽織っていた。底高(厚底)のポックリ下駄(つかかけの様なもの、靴では決してなかった)を履き、ノーネクタイのシャツに、濃紺か黒の上下を端正な体にまとっていた。荷物は何も持っていなかった。新聞か週刊誌の様なものを丸めて手に持っていたかもしれない。ボクの話聞いて、ただ一言「いいですよ。ポーランドにいる間、アナタも“天井棧敷”の一員ですよ」と言って、受け入れてくれた。しかし、その責任がいかにかいものか、この時の自分には思いも寄らなかった。

国際青年演劇祭はポーランド西南部、ドルヌイ・シロンスク県の県都ヴロツワフ市で行われた。会場のポルスキー劇場(ポーランド劇場)は大変歴史的にも上演的にも、権威ある大劇場であった。

日本でもそうであろうが、ましてやポーランドの当時は社会主義国家の、教条主義的な文化の域を出ない、退屈な歴史劇しかやっていない劇場でいきなり、劇場責任者や舞台責任者との打ち合わせで、「…チョマロ…我々の今度の芝居には“火”が必要だから舞台で“火”を燃やすから…その様、通訳してくれ!」「アジェ…?」「ダメです。消防法があって、ポーランドの劇場の舞台では、いかなる火も厳禁です!」「チョマロ、この芝居(盲人書簡)は“闇と光”だ…わかるでしょう。“火”は不可欠な条件である」「チョマロ、バルコンにハシゴを掛け、舞台と同時進行でバルコンでも芝居をしたい。バルコンにハシゴを掛ける手配と、許可をしてもらいたい…」「アジェ!」次々と出される寺山さんの奇抜な要求と、ポーランド側の演劇事情の間に挟まれて、夜も眠れない有様であった。

“棧敷”は良い、何日かの公演がハネれば日本へ帰って行く。「ポーランドに残って演劇の勉強を続けて行くボクの立場はどうなるんだ…」「演劇をやってきたものとして寺山さんの狙っている演劇効果は痛いほど理解できる。アングラも正統もない。こうなったら日本の代表としての棧敷の芝居を成功させるしかない」。ボクの結論はそこに至った。「寺山さん…あまり説明しないで、必要なものを準備させて、ヌキうちでやりましょう。しかし、劇場を決して火事で燃やしてはダメですよ。日本とポーランドの外

交問題になりますからね」「…わかった…了解！」  
そしてヴロツワフの国際青年演劇祭では“テンジ  
ョウサジキ”というポーランド語が出来てしまった。  
終演の次の日の午後、ヴロツワフ中央駅から、

パリー東駅行きの汽車で“天井桟敷”の一団は正  
に“台風一過”のすさまじいカルチャーショックをポ  
ーランド各地に残して去って行った。

### —九條さんのこと—

ある年の国際寺山修司学会で、久しぶりで再会した。ポーランド以来3度目である。飲み物が置いてある控  
室には誰もいなかった。紙コップを持ち、春日(はるび)射すベランダへ出た。

僕は思い切って彼女にこう質問した。「今頃、あのような本が出るのは、いかがなモノ  
なのでしょう？」それは、永年アムステルダムに住んでいた田中未知氏の帰国後まも  
なく出版された『寺山修司と生きて』という、三角関係を思はせる本の事であった。



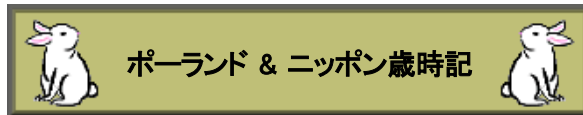
すると九條さんはこう言った。「アノネ、霜ちゃん、寺山修司  
を愛した女はあまたいるのヨ…けどね、寺山修司が愛した女  
は私一人よ！」キゼンというより、僕の目を見て諭(さと)すように  
言った。ベランダは五月の光の中にあつた。



ご逝去の報に接し、心より哀悼の意を表します。 合掌。

- ※ 筆者は国際寺山修司学会の『寺山修司研究』にエッセイを連載、今春(2014年4月)第7号発行。
- ※ 本稿は「プレス空知」(2013年8月28日)を改稿
- ※ 九條今日子(寺山映子)氏、平成26年4月30日永眠(享年78)
- ※ 写真提供: ㈱テラヤマ・ワールド

### 〈連載俳句〉



秋です。俳句を詠みはじめたのは、秋でした。  
秋には、新学年、つまり私と夫にとっての一年の  
仕事も始まります。また、お隣さんから新しい生  
命が宿ったことを聞かされたのも、ちょうど秋のこ  
とでした。

jesienny powiew  
nitka twojego życia  
w kilimie świata

〈ポズナン市、津田モニカさん〉

モニカ

秋風にとぶ糸 生きる錦かな

千代麿

みむらさぎのしきときのみじかけれ

秋十月(実むらさき)紫式部の実

青女乗る蝦夷の炭住ブリキ屋根

冬十二月(青女)霜のこと

くずあんをかけていただく蕪蒸

冬十二月(蕪蒸(かぶらむし))かぶのむしもの

投稿(俳句、短歌、川柳など) 歓迎—事務局へハガキで

〈岩見沢市、霜田千代麿さん〉